

黄金の3時間

授業の方向性を示す

授業者がやりたい授業を口で説明するのではなく、まずは実際にやってみることが一番です。その後、やってみてから解説なり説明をするようにします。そうすれば、生徒は、これから展開される授業に対してイメージをもつことができ、授業に期待感を抱くことができます。ポイントは、前置きなしにいきなり授業を始めることです。

診断的評価を行う

国語科における生徒の実態をつかむために、読む、書く、話す、話し合う活動を行うようにします。そして、「座席表」などを使って生徒の実態をつかみます。顔と名前が一致しない段階なので座席表にメモしていくようにします。読む、書く、話す、話し合う活動における一人一人の特徴を把握します。

学習訓練を行う

適度な緊張感をもたせながら学習のルールづくりをします。このルールが1年間の授業を支えるものになります。

生徒に言ってはいけないこと

授業開きに限ったことではありませんが、「小学校でやったでしょ」「小学校でやったはず」は禁句です。授業で扱ったことと身についたかどうかは、別の問題です。

事前にやっておくべきこと

自分が担任するクラスであれば、生徒全員の名前を覚えておきます。最初の授業の前には、生徒の名前の読み方を確認しておきます。誰でも名前を間違えられることは嫌なことです。

お勧めできない「授業開き」

生徒一人一人に順番で自己紹介をさせていくのはどうなのでしょう。他教科の授業でも自己紹介をさせていたら、生徒にとってどうなのでしょう。自己紹介では、一人あたりの活動量が少なすぎます。そもそも誰のための自己紹介なのでしょう。

国語だからということで「今まで読んだ本で一番心に残っているもの」を紹介させることがあります。大事な大事な授業開きでやるべきことなのでしょう。また、小学校の国語と中学校の国語の違いを説明することがあります。説明するよりも、実際にやってみたほうがわかりやすく、理解しやすくなります。授業開きに定型はありません。定型はありませんが、創意工夫は必要です。

「授業開き」を“黄金の3時間”にするために

授業開きを黄金の3時間にするためには、実際に「こういう授業をしていく」という方向性を示すようにします。声を出す活動をたくさん行います。全員参加を保障します。授業者の話は、1回1指示など簡潔にわかりやすくします。「こうなってほしい」という1年後の姿、3年後の姿を伝えるようにします。

授業開きが、必ず黄金の3時間になるわけではありません。最初の3時間で、その後の100時間が決まってしまう。入念かつ周到な準備のもと、最初の授業に臨む姿勢が大切です。